

地域の危険度マップ

地震による建物の壊れやすさ

- 赤色で示した地域ほど、被害を受ける建物が多いことを示しています。
- 実際には、建物の強さは個々の建物により異なります。
- 古い木造建物ほど地震に弱い傾向にあります。
- 古い木造住宅にお住まいの方は、耐震診断を受けましょう。

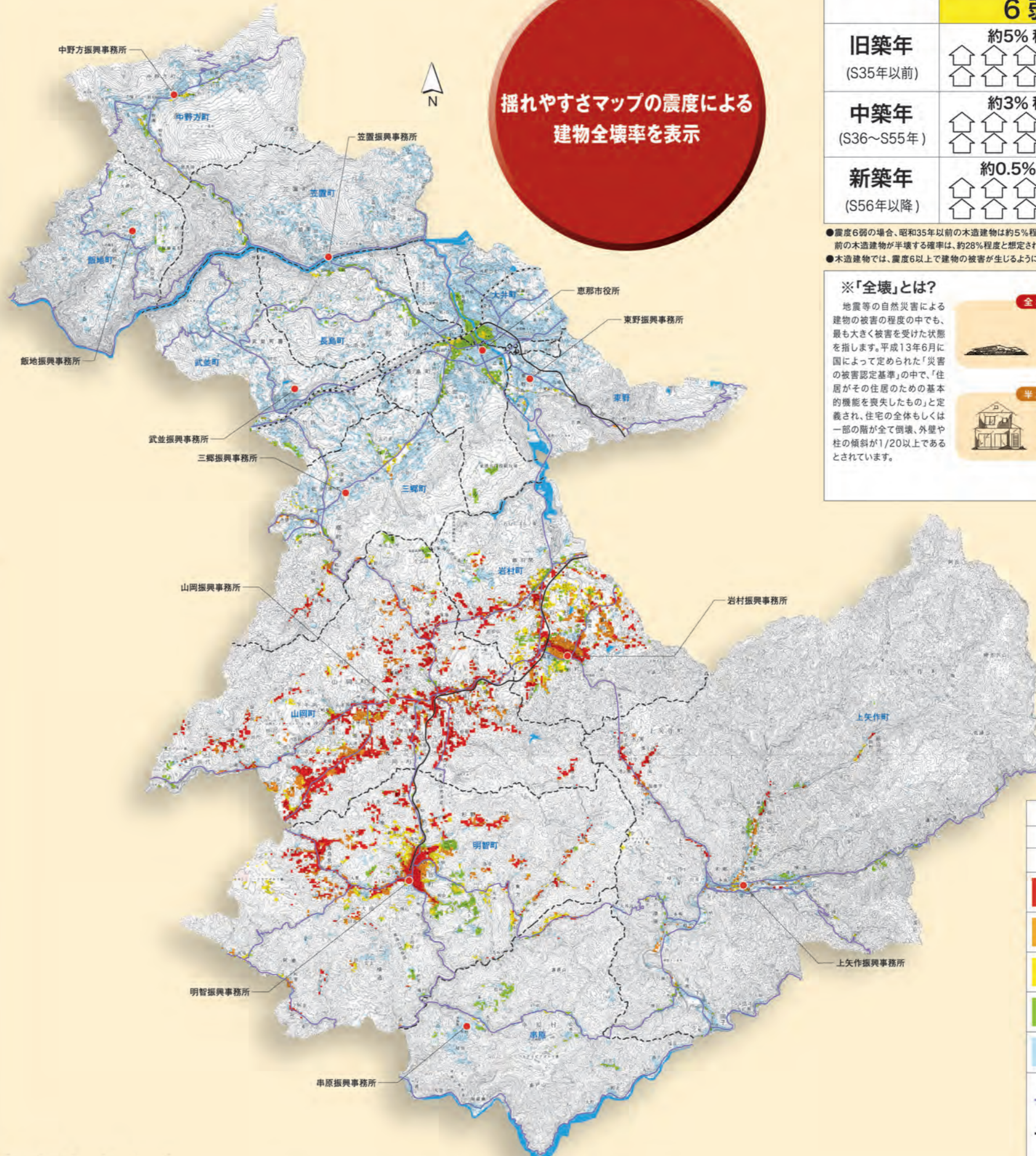
地域の危険度マップの見方

「地域の危険度マップ」とは、「揺れやすさマップ」で示された震度と建物構造(木造・非木造)、建築年次別の建物棟数(平成19年1月)から全壊する建物の割合(全壊率)を算出し、50mメッシュ毎に、5段階の危険度として示したものです。特に、赤色で示した地域ほど、危険度が高くなり、相対的に被害を受ける建物が多いことを示しています。

なお、実際には、地震に対する建物の強さは個々の建物により異なります。そのため、危険度が高い地域であっても耐震化した建物は倒れにくく、反対に危険度の低い地域であっても老朽化した建物は全壊する可能性があります。特に古い木造建物は地震に弱い傾向がありますので、危険度が低い地域であっても十分な注意が必要となります。

古い木造建物にお住まいの方は、耐震診断を受け、必要に応じて耐震補強工事を行うことをお勧めします。

このマップの作成方法は、平成17年3月に内閣府が策定した「地震防災マップ作成技術資料」にもとづいています。



揺れやすさマップの震度による
建物全壊率を表示

揺れ(震度)に応じた木造建物の全壊率		
	6弱	6強
旧築年 (S35年以前)	約5%程度 	約50%程度
中築年 (S36~S55年)	約3%程度 	約33%程度
新築年 (S56年以降)	約0.5%程度 	約6%程度

●震度6弱の場合、昭和35年以前の本造建物は約5%程度の割合で全壊すると想定されていますが、この時、昭和35年以前の本造建物が半壊する確率は、約28%程度と想定されています。
●本造建物では、震度6以上で建物の被害が生じるようになり、建築年次が古いものほど建物の被害が大きくなります。

※「全壊」とは？

地震等の自然災害による建物の被害の程度の中でも、最も大きく被害を受けた状態を指します。平成13年6月に国によって定められた「災害の被害認定基準」の中で、「住居がその住居のための基本的機能を喪失したもの」と定義され、住宅の全体もしくは一部の階が全て倒壊、外壁や柱の傾斜が1/20以上であるとされています。

※「危険度」とは？

市の家屋課税台帳(平成19年1月1日現在)の建物情報より構造・建築年次別建物棟数を把握し、「揺れやすさマップ」に掲載した地震が発生した場合の全壊棟数率を算出し、建物被害を5段階の危険度として示しています。特に、危険度が高い地域は被害を受ける建物が多く、建物の倒壊等によって使用中の火気器具等から出火し、周辺建物への延焼、建物が焼失する恐れがあります。また、建物やブロック塀等の倒壊、家具の転倒・落下により死亡や負傷といった人的被害を招く可能性が高いことが想定されますので、ぜひ、日頃から地震災害への備えを心がけてください。

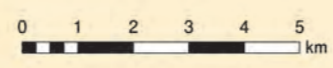
地域の危険度マップの凡例		
全壊率		
危険度	危険度	地域内の建物の中で全壊する建物の割合
	危険度5	10%以上
	危険度4	7%以上 10%未満
	危険度3	5%以上 7%未満
	危険度2	3%以上 5%未満
	危険度1	0%以上 3%未満

	主要道路		JR中央本線
	町界		明知鉄道
	河川等		

地震に自信をもつための10カ条

地震の時、まず自身の安全確保が第一です。居る場所によって対応が違いますが、身の回りの物で頭や身体を守ってください。パニックにならず、冷静に行動できるよう日頃から対応を覚えてください。

- まず、自分を守る**
学校や家庭にいるときはテーブル、机などよおな家具の下に身をかくし、しばらく様子を見ます。
- すばやく火の始末**
火災が発生しなければ地震による被害はそれほど大きくなりません。使用中のガス器具、石油ストーブなどはすばやく火を消すことが大切です。ただし、油や熱湯のやけどには十分気をつけましょう!
- 出口の確保を**
地震の揺動で扉がゆがみ、開かなくなることがあります。地震が発生したら玄関をあけて出口を確保しましょう。
- 火が出たらすぐ始末**
万一出火したら、大声で隣近所に声をかけ、みんなで協力しあって初期消火に努めましょう。
- あわてて外に飛び出さない**
あわてて外に飛び出すと瓦や看板などが落ちてきて思わぬケガをすることがあります。落ち着いて行動しましょう。
- せまい路地や、かけや川べりに近寄らない**
屋外で地震のゆれを感じた時はブロックやかけ、川べりは要注意です。近付かないようにしましょう。
- 避難は徒歩で、持ち物は最小限**
避難するときには必ず徒歩で避難しましょう。自動車は消火、救急活動のじゃまになります。また、携帯品は必要最小限に。緊急時には、「モノより命」避難を優先しましょう。
- みんなが協力しあって応急救護**
大地震のときにはけがが多くなります。そんなときはお互いに協力し合って応急救護をしましょう。
- 正しい情報をつかむ**
市の広報、ラジオやテレビの情報に注意し、デマにまどわれされないようにしましょう。
- 落ちついて、もう一度落ち着いて**
地震は1分過ぎればまず安心。日ごろ、学校、職場、家庭で話し合ったことを思い出そう。



※この地図は、国土院地理院の承諾を得て、同院発行の数値地図50000(地図画像)及び数値地図25000(地図画像)を複製したものである。(承認番号 平19総審第698号)